

自己評価報告書

平成23年 4月 1日現在

機関番号：32404

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2008～2011

課題番号：20242010

研究課題名(和文) 自律調和的視点から見た音韻類型のモデル

研究課題名(英文) A Model of Phonological Typology from the Perspective of Autonomy and Harmony

研究代表者 原口 庄輔 (HARAGUCHI SHOSUKE)

明海大学・外国語学部・教授

研究者番号：50101316

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：音韻類型、母音、子音、アクセント、音節、語順、最適性理論

1. 研究計画の概要

本研究は、一見混沌とした音韻類型に関する問題を整理・統合し、音韻類型を捉えるのに相応しいモデルを打ち立てることが目的である。具体的には、従来の視点に加えて、(1)ボトムアップの次元(帰納的方法論)(2)トップダウンの次元(演繹的方法論)(3)パラレルな横の次元(相関関係に基づく類型)という三つの視点から音韻類型を捉えなおすというのが、本研究の基本的な計画である。

(1)においては、通言語的にどのようなタイプが存在し、どのように一般化できるかを追求する。

(2)においては、言語類型に存在する含意関係や階乗類型について、存在する型と存在しない型を予測するにはどのような理論体系でなければならないか、最適性理論の成果を活用して、追求する。

(3)では、音韻構造相互の相関にとどまらず、音韻構造と形態構造、統語構造の相関について、その妥当性を検証し、説明理論を構築することを追求する。

上記のような目的を達成するための具体的な研究計画は次のようになる。

- (4)月例の研究会と海外の研究者を招聘し、全体的な研究発表会の開催
- (5)代表者と分担者各自の国内外の学会での研究成果の発表、論文、著書の執筆
- (6)音韻類型アーカイブの構築

2. 研究の進捗状況

各年度における本研究課題の進捗状況は以下のとおりである。

・2008年度

- (1)東京音韻論研究会を東大学駒場キャンパ

スにて開催し(4月、5月、6月、7月、9月、10月、11月、12月、1月、2月、3月)。

(2)本研究組織の研究会を開催(8月24日、於、ガーデンホテル金沢)し、代表者と分担者の研究発表のほかに、Jeroen van de Weijer氏(オランダ王国、ライデン大学教授)を講演者として招聘。

(3)音韻論フェスタ2009を共催し、John Whitman氏(アメリカ合衆国、コーネル大学教授)を講演者として招聘。

(4)代表者と分担者による著書2件、論文24件と学会での口頭発表、講演22件。

・2009年度

(1)研究活動の一環である東京音韻論研究会を東京大学駒場キャンパスにて開催(4月、5月、6月、7月、9月、10月、12月、1月)。

(2)国際音声学・音韻論フォーラムを神戸大学において、8月26日・27日の両日開催した。海外から下記の研究者を招聘。

招聘講演者：Jeroen van de Weijer氏(中華人民共和国、上海国際関係大学教授)、Andries W. Coetzee氏(アメリカ合衆国、ミシガン大学助教授)、Jongho Jun氏(大韓民国、ソウル大学教授)、René Kager氏(オランダ王国、ユトレヒト大学教授)、Benjamin Munson氏(アメリカ合衆国、ミネソタ大学准教授)、Mirjam Broersma氏(オランダ王国、ラドボンド大学 research scientist)、Ian Maddieson氏(アメリカ合衆国、ニューメキシコ大学教授)、Harry van der Hulst氏(アメリカ合衆国、コネチカット大学教授)、Joseph Emonds氏(連合王国、ダーラム大学教授)

(3)音韻論フェスタ2010を、本研究の活動の一部として開催。下記の著名な海外の音韻論研究者を講演者として招聘。招聘講演者：Donca Steriade氏(アメリカ合衆国、マサチューセッツ工科大学教授)、Elisabeth O.

Selkirk 氏 (アメリカ合衆国、マサチューセッツ大学アマースト校教授)、Stuart Davis 氏 (アメリカ合衆国、インディアナ大学教授)、伊藤順子氏 (アメリカ合衆国、南カリフォルニア大学サンタクルーズ校教授)

(4) 代表者と分担者による著書 1 件、論文 30 件と学会での口頭発表、講演 9 件。

・2010 年度

(1) 東京音韻論研究会を東京大学駒場キャンパスにて開催 (4 月、5 月、7 月、9 月、10 月、11 月、12 月、1 月、3 月)。

(2) 音韻論フォーラム 2010 (8 月 23 日～25 日、於静岡県立大学) に、Catharine Ringen 氏 (アメリカ合衆国、アイオワ大学教授) を講演者として招聘。

(3) 年度末の 3 月 24 日～26 日に KKR ホテル熱海において研究発表会を開催し、代表者と 7 名の分担者が研究発表。

(4) 代表者と分担者による著書 2 件、論文 16 件と学会での口頭発表、講演 27 件。

3. 現在までの達成度

② おおむね順調に進展している。

(理由)

(1) 1 に記した三つの目的のうち、(4) と (5) については、当初の計画以上に進展している。

(2) 1 の (6) については、2009 年度までは、代表者と分担者の研究成果の出版と研究成果の学会での発表、講演が主たる研究活動であったため、おおむね順調に進展しているが、未だ構築中という状態にある。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 当初の研究計画のうち、研究集会の開催、海外研究者の招聘、研究成果の出版、および研究成果の学会発表という点については、最終年度もこれまでと同様に進める

(2) 音韻類型アーカイブについては、現在構築中で、公開できる状態にすることを旨とする。

(3) 音韻類型アーカイブに加えて、本研究課題 4 年間の研究成果を、冊子としてまとめ、成果を世に問うことにする。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件、総件 70 件中)

① 米田信子 「ヘレロ語における動詞の声調 (バントゥ系, R31)」『スワヒリ語&アフリカ研究』22, 109-131, 2011 年. 査読有.

② Nishiyama, Kunio (西山國雄) “Penultimate Accent in Japanese Predicates and the Verb-noun Distinction,” *Lingua* 120, 2353-2366, 2010 年. 査読有.

③ Tanaka, Shin-ichi (田中伸一) “Origins of Typological Gaps in Parallel and Serial OT,” 『音声研究』13, 13-21, 2009 年. 査読有.

④ Sasaki, Kan (佐々木冠) “Hardening Alternation in the Mitsukaido Dialect of Japanese,” 『言語研究』134, 85-117, 2008 年. 査読有.

⑤ 寺尾康 「言い間違い資料による言語産出モデルの検証」, 『音声研究』12, 17-27, 2008 年. 査読有.

[学会発表] (計 5 件、総件 79 件中)

① 田中伸一 「アポトーシスとしての幼児発話の特異性：音韻獲得の論理的問題」, 第 13 回明海大学応用言語学セミナー (招待講演), 明海大学, 浦安市. 2010 年 12 月 12 日.

② 寺尾康 「言語的逸脱事例コーパスの貢献と課題—言い間違い研究を中心に—」日本英語学会第 28 回大会シンポジウム, 2010 年 11 月 14 日, 日本大学文理学部, 東京都世田谷区.

③ 上田功 「音韻獲得、音韻障害、そして音韻理論」第 13 回認知神経心理学研究会 (招待講演) 2010 年 8 月 7 日, 東京学芸大学, 小金井市.

④ Ueda, Isao (上田功) “An Idiosyncratic Vowel Disorder in Japanese,” The 13th International Clinical Linguistics and Phonetics Association Meeting, 2010 年 6 月 26 日, ノルウェー王国オスロ市.

⑤ Yoneda, Nobuko (米田信子) “Tone Patterns of Herero Nominals,” International Workshop “Academy UK-Africa Partnership: Languages and Linguistic Studies of Southern African Languages” 2009 年 9 月 22 日 (招待講演), ボツワナ大学, ボツワナ共和国ハボローネ市.

[図書] (計 2 件、総件 4 件中)

① 白石英才・ガリーナ・ローク 『ニヴフ語音声資料 7 ヴァレンティナ フィリモノヴナ・チャフカン』, 札幌学院大学, 2010 年, 108 頁.

② 田中伸一 『日常に潜む音法則の世界』, 開拓社, 2009 年, 224 頁.

[その他]

① 小松雅彦 『中国語 MULTEXT コーパス』国立情報学研究所音声資源コンソーシアム, 東京, 2010 年 7 月.